

思春期前まで面会交流を経験した 子どもの別居親像形成のプロセスに関する質的研究

Qualitative Study on the Process of a Non-custodial Parent Image Formation of a Child
who Experienced Visits Only Before Adolescent

小川 洋子

Yoko OGAWA

(日本女子大学人間社会研究科 心理学専攻博士課程後期)

要約

本研究の目的は、両親が幼少期に別居もしくは離婚し、その後思春期前まで面会交流を経験した子が、交流中断後どのように別居親像を形成していくかのプロセスを明らかにすることである。0～4歳に両親の離別を経験し面会交流を経験していたが、5～8歳に交流が中断した3名の男女に面接調査を実施し、複線経路・等至性モデルを用いて分析を行った。その結果、①面会時のいい思い出、理由がわからない中断を経て、子は「実体を伴わない、いい別居親像をもつ」こと、②周囲との違い等から別居親への関心をもつが、別居親について触れてほしくなさそうな同居親の様子に葛藤を感じて別居親のことを聞けなくなり、「実体を伴わない、いい別居親像をもち続ける」に至ることが明らかとなった。また、別居親の情報がほとんどなく、「実体を伴わない、いい別居親像をもち続ける」ことが、子自身の結婚や離婚への漠然とした不安感を強めている可能性が示唆された。

[Abstract]

The purpose of this study is to clarify the process of how a child, whose parents divorced and then experienced visits only before adolescent, formed a non-custodial parent image.

Interviews were conducted with 3 adults whose parents separated when they were 0-4. They have experienced visits, but discontinued the visits at the age of 5-8. Interview data were analyzed using Trajectory Equifinality Model.

It became clear that

1) after good experiences at the time of visits and an interruption for which the reason is unknown, children "have a good non-custodial parent image without substance".

2) Moreover, children feel a conflict between interests in the non-custodial parent and the custodial parent who doesn't want to touch them. And children "continue to have a good non-custodial parent image without substance".

It was also suggested that little information on the non-custodial parent may have increased vague anxiety about children's own marriage or divorce.

問題と目的

厚生労働省による調査(2020)によると、我が国の2018年における未成年の子がいる離婚件数は約12万組、親が離婚した未成年の子の数は約21万人であり、親の離婚を経験する子どもの数は累積され続けている。

親の離婚の影響は子どもの発達段階ごとに異なっていると考えられている(棚瀬, 2010; こども未来財団; 2013)。また, Wallerstein (1985)は, 親の離婚を経験した子どもは, 成人しても悲しみや親への憤り, 喪失感を持ち続けており, 特に女性は, 将来自分も離婚するのではないかと怖れていたと報告している。野口・櫻井(2009)も, 親の離婚を経験した青年期及び成人期の男女31名にインタビューを実施し, 親の離婚は子どもが青年期あるいは成人期を迎える段階において「親密性の怖れ」としてその影響が顕在化される場合があることを明らかにしている。また, こども未来財団(2013)も, 青年期以降の女性9名にインタビューを実施し, 彼らが「異性との関係性の不安」や「結婚への不安」「子どもを持つことへの不安」をもっていたことを報告している。これらの先行研究は, 親の離婚を経験した子どもは, 青年期以降に, 自身の恋愛や結婚に関する葛藤や不安をもつ可能性があることを示唆していると言えよう。

このような離婚家庭に育つ子の適応リスクを減少させるための保護的因子の1つとして, 「共に暮らしていない親(以下, 別居親)との良好な関係」が指摘されている(Kelly & Emery, 2003)。親子の関係性を築くために子と別居親が面会等を行うことを, 日本では面会交流という。2011年における民法の一部改正では, 父母が協議上の離婚をするときは, 父または母と子の交流(面会交流), 子の監護に要する費用の分担(養育費)を定めること, その際は子の利益を最も優先して考慮しなければならないと明記された(民法766条)。面会交流が子の成長に影響を与えることは, 他の研究でも繰り返し提言されている(Wallerstein et al, 2000; 棚瀬, 2004; 小田切, 2009; 青木, 2011)が, その実施率は50%に満たず中断率も高い(厚生労働省, 2017)。野沢(2019)は, 離婚後に親権を失った親と子どもの関係が失われやすい傾向に触れ, その背景に, 「離婚後は子どもの親はひとりになる」という固定観念が社会に浸透していることを指摘している。

日本では, 未成年の子がいる離婚の場合, 妻が全児の親権を行う場合が80%を超え(厚生労働省, 2020), 面会交流は父子間で行われることが多い。そのため, 父子関係に関する研究を概観すると, 尾形(2011)はこれまでの父子研究について, 「父親は子どもの発達・適応にどのような影響力をもつのか」という一方向からの視点に基づいて検討されてきたことを指摘している。たとえば, 幼児期に関しては, 父親からのしつけや日常的な遊び, 世話行為が子どもの社会性の発達に影響を及ぼすことが加藤ら(2002)や尾形(1995)によって示されている。また, 秋光・村松(2011)は, 短い時間であっても父親が子どもと積極的にコミュニケーションをとり, 愛情表現や自立に向けた支援を行うことが児童期の子どもの社会性の発達に貢献していることを示唆している。一方で青年期は, 研究が盛んな幼児期と比較すると詳細な検討がなされていない(今野, 2012)。青年期になると, 具体的・直接的な親子の交流は幼児期と比べて減少するが, それは関係の希薄さを意味するのではなく, 子どもの内的世界に形成された親との関係に重要性が移行することを意味する。特に父親は, 母親と比較すると接触時間が少ないことが多く, 子どもにとって内的な存在としての重要性が大きくなる(今野, 2012)。したがって, 青年期は, 「父親は子どもの発達・適応にどのような影響力を持つのか」という一方向からの視点だけでなく, 青年自身が「どのように親をイメージし, 親の存在を認識し・評価しているのか」について検討することが重要だとされている(今野, 2017)。この点に関し, 今野(2012)は, 青年が内的に形成する父親の人物像を「父親像」と定義し, その父親像を“安心感”“権威”“身勝手”“回避”から構成されるものとして, 4つの要素それぞれの中学生から大学生までの発達の变化を明らかにした。そして,

大学生になり父親との適度な心理的距離が確立されるにつれて、青年は欠点や矛盾を持った父親を受容できるようになること、身勝手さを感じながらもそれを受容し、全てを批判的に捉えるのではなく1人の人間として捉えるようになることを示唆している。親を批判的に捉える時期を経て親を1人の人間として捉える変化の過程は他の研究でも示されている(大島, 2009)。

では、両親の別居もしくは離婚を経験した子ども(青年)がもつ、別居親像はどのようなものだろうか。小川(2018)は面会交流を継続している20歳以上の男女15名にインタビューを実施し、面会交流を継続してきた子は、中高生にあたる青年期前期・中期頃から親を吟味し、1人の人間としての等身大の親との関係性を築いていることを示している。また、野口(2019)は別居親が母親である20代前半の女子学生3名にインタビューを実施し、面会交流を通じて、子は母親を客観視し、1人の女性としての母親の姿を受け入れていくことを明らかにしている。また、小川(印刷中)は、思春期以降に面会交流を経験したが、その後中断している子ども12名にインタビューを実施し、どのようなプロセスを経て子どもは別居親と離れていくのかを示している。そして、中断後、子どもは成長する中で様々な価値観と出会い、自分の気持ちを話せる場所を得ることで、別居親や同居親への理解を深め、両親の関係性、自分と両親との関係性を俯瞰的に捉えるようになること、両親の離婚と適度な距離を得られるようになることを示唆している。これらの研究からは、子どもがどういったイメージ要素から別居親像を形成しているかは明確に示されていないが、面会交流を通して、青年期以降1人の人間としての別居親像を子どもが捉えるようになる可能性を読み取ることができる。一方で、小川(2019)は8歳時に両親が離婚後9歳から面会交流を実施していたが、10歳で同居親である実母より面会交流を中断させられた20代女性の事例研究において、その女性が等身大の父親像というよりは理想的な父親像を持ち続けていることを示した。女性は自分の父親像が美化されたものかもしれないと認識しつつ、離婚した理由は知りたくないため聞かないという選択をしており、それに関して、父親像を壊さずに大切にしておきたい可能性を小川は示唆している。このように、両親の離別を経験した子どもがもつ別居親像についての知見は蓄積されつつある。しかし、幼少期から思春期前までに面会交流を体験し、その後面会交流が中断した子どもは別居親像をどのように形成していくのか、別居親についてどのように考えているのかに着目した研究はほとんどない。したがって本研究では、両親が幼少期に別居もしくは離婚し、その後思春期前まで面会交流を経験し、その後理由が特にわからないまま面会交流が中断した子にインタビュー調査を実施し、子はその後別居親像をどのように形成していくかをプロセスとして明らかにすることを目的とする。子どもがどのような別居親像を形成しているか、また別居親像を形成していくプロセスの中で、子ども達が何を考え、どのような思いで過ごしているのかを知ることは、今後同様の経験をする子どもを理解し、支援する一助になると考える。

研究方法

1. データの収集方法

関東圏の複数の私立大学でフライヤーを配布し、研究協力者を求めた。フライヤーには、①研究内容、②協力をお願いしたい方の詳細、③想定しているインタビュー時間や場所、時期、④インタビュー開始後でも研究参加を辞退できること及び個人情報への配慮を記載した。また、知人

にも同様の協力を呼びかけた。調査データ収集の期間は2017年7月から2018年7月であった。面接方法は、インタビューガイド(表1)を用いた半構造化面接で、研究協力者の希望した場所において筆者自身が実施した。面接は1人約50～70分であった。面接データは許可を得てICレコーダーに録音し、逐語記録を作成した。

表1 インタビューガイド

両親が別居もしくは離婚するという説明を受けましたか
離別後初めて別居親と会った時のことを教えてください
その時どのような気持ちでしたか
別居親のことをどう思いましたか。イメージの変化はありましたか
特に印象的だった交流を教えてください
その交流前後で、別居親のイメージの変化はありましたか
面会交流前後の同居親の様子を教えてください
面会交流を中断したきっかけは何かありましたか
中断した時の気持ちを教えてください
面会交流を再開したいと思ったことはありますか
親の離婚や面会交流に関する事で誰かに相談をしたことはありましたか
面会交流が自分に与えた影響はどのようなものだったと思いますか
これから交流をする親子にこれだけはいいたい、ということはありませんか

2. 研究協力者の属性

研究協力者は、幼少期に両親の別居もしくは離婚を経験し、その後思春期前まで面会交流を経験したことがあるが、その後中断し現在は面会交流をしていない青年期以降の男女3名(男1名、女2名)である(表2)。面会交流とは、「子どもと離れて暮らしている父母の一方が子どもと定期的、継続的に、会って話をしたり、一緒に遊んだり、電話や手紙などの方法で交流すること(法務省, 2020)」, 「離婚後又は別居中に子どもを養育・監護していない方の親が子どもと面会等を行うこと(裁判所, 2020)」などと定義されている。本研究においては、面会交流とは「離婚後又は別居中に子どもを養育・監護していない方の親と子どもが、会って話をし、一緒に遊ぶ等の方法で交流すること」と定義することとする。研究協力者Aは、最後に別居親に会ったのは小学5,6年生の時だったが、その際は父母が話をしているのを母方祖父母と遠目から見ており、帰りの挨拶以外話さなかったとのことであったため、この回は「会って話をし、一緒に遊ぶ等の方法で交流すること」に当てはまらないと判断した。したがって、本研究においては、研究協力者Aの最終的に面会交流をした年齢は実際に会って話し、遊ぶなどした8歳の交流までであったとし、分析を行っている。なお、3名とも別居親は父親である。

表2 研究協力者の概要(インタビュー当時)

	性別	現年齢	離別時年齢	別居親	交流頻度	中断時の年齢	親の再婚の有無
A氏	女	19	4	父	7～8歳で3回程度	8	なし(父不明)
B氏	女	30	0	父	6歳までに数回	6	父有
C氏	男	20	3	父	5歳までに数回	5	なし(父不明)

3. 倫理的配慮

インタビュー前に研究趣旨と得られたデータの利用目的、個人情報への守秘、研究協力に対する

撤回の自由等について口頭並びに文書で説明したのち、自筆署名の書面をかわして研究協力の同意を得た。また、個人が特定されるデータは逐語記録より削除し研究対象外とした。なお、本研究に関する倫理的配慮については、日本女子大学ヒトを対象とした実験研究に関する倫理審査委員会の承認を得ている。

4. 分析方法

本研究では、データの分析に複線経路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Model : 以下, TEM)を用いた。TEMは、時間を捨象せず個人の変容を社会との関係で捉え記述しようとする方法論である (安田・サトウ, 2012)。個々人がそれぞれ多様な経路を辿っていたとしても、等しく到達するポイント (等至点)があるという考え方を基本とし (安田, 2005)、人間の発達や人生経路の多様性・複線性の時間的変容を捉えることに適した手法である。「等至点 (Equifinality Point : EFP)」は研究者が定める研究対象となる現象である (安田・サトウ, 2012)。等至点に到達する間には、各々の人生の選択や出来事があり経路が分かれる。これを「分岐点 (Bifurcation Point : BEF)」と呼ぶ。また、多くの人が経験するような経験でありかつ等至点に至る経路にあって重要なものは「必須通過点 (Obligatory Passage Point : OPP)」と呼ばれている。そして、等至点に近づくことをサポートする力を「社会的ガイド (Social Guidance : SG)」, 阻害・抑制する力を「社会的方向づけ (Social Direction : SD)」と呼ぶ。これらの概念を用いて、個々人の人生のプロセスを可視化していくのがTEMである (表3)。

さらにTEMでは、「両極化した等至点 (Polarized Equifinality Point : P-EFP)」という概念がある。これは、研究者が設定した等至点の補集合的な経験を示すものである (安田・サトウ, 2012)。両極化した等至点を設定することは、非可逆的な時間の流れを横軸として置いた際、等至点と両極化した等至点を縦軸として描くと全体の枠づけとして機能すること (サトウ, 2015)、実際にはデータとして収集することはできなかったが存在しうる経路が可視化され、認識を広げられること (安田・サトウ, 2012)といった点で役立つ。

また、TEMで扱うデータ数については、「1・4・9の法則」が提唱されている。研究協力者が1名であれば、個人の経路の深みを探ることができ、4±1名であれば経験の多様性を描くことができ、9±1名であれば経路の類型を把握できるとされている (安田・サトウ, 2012)。

本研究の目的は、思春期前まで面会交流を経験した子どもがその後別居親像をどのように形成していくかをプロセスとして明らかにすることである。研究協力者は3名であり、4±1名であるため、TEMを用いることで、各々の経験の多様性を損なうことなくプロセスとして描くことができると判断した。また、データにはないが存在しうる経路も可視化できるという点で、より俯瞰的に研究協力者が辿ってきた経路を明らかにできると考え、本研究ではTEMを採用した。

表3 TEMの概念説明

主要な概念	概念の説明
等至点: EFP (Equifinality Point)	個々人が多様な径路を歩み進めるなかで等しく到達する地点
両極化した等至点: P-EFP (Polarized Equifinality Point)	研究者が設定した等至点の補集合的な経験を示す地点
分岐点: BFP (Bifurcation Point)	径路が複線にわかれるような経験
必須通過点: OPP (Obligatory Passage Point)	多くの人が経験するような経験でありかつ等至点に至る径路にあって重要なもの
社会的ガイド: SG (Social Guidance)	等至点に近づくことをサポートする力
社会的方向づけ: SD (Social Direction)	等至点に近づくことを阻害・抑制する力

5. 分析手順

分析は安田・サトウ(2012)にならい、以下の手順で行った。①逐語記録を精読し、語られた経験を意味のまとまりごとに切片化し、それぞれに内容を端的に示すラベルをつけた。②行為や経験、心情を示すラベルをそれぞれの時間軸に沿って並べ、整理した。③その上で、各々の類似した内容を時間軸を損なわないようにまとめ、それらを表すラベルを検討した。④そして、両極化した等至点や語りからは得られないが論理的に考えられる経験(仮想径路)も考慮しながらTEM図を作成した。データ分析に関しては、筆者の所属する大学院の指導教官の指導を受けると共に、離婚家族のカウンセリング経験を有する臨床心理士と検討を行った。

結果

1. 等至点の設定

それぞれ異なる径路を歩んでいても、非可逆的な時間の流れの中で辿り着く等しくあるいは類似した経験が等至点である。実際には研究テーマの設定そのものが等至点となる。その際重要であるのは、経験者のライフストーリーに意味づけられた等至点とされていることである(安田・滑田・福田・サトウ, 2015)。

本研究では、「思春期前まで面会交流を経験した子どもの別居親像形成のプロセス」を明らかにすることを目的としている。当初、等至点を「別居親像を形成する」とし、分析を行ったが、3名の別居親像が似ていたため、彼らをもつ「実体を伴わない、いい別居親」という別居親像を等至点とすることとした。また、別居親像が形成されるには、別居親像が形成されるまでと形成された別居親像をそのままもち続けるプロセスが存在すると考え、「実体を伴わない、いい別居親像をもち続ける」を2つ目の等至点として設定した。

ここでは、思春期前のみ当面会交流を経験した子どもの別居親像形成のプロセスを、2つの等至点とそこに至る背景要因から説明する。図1は完成したTEM図であり、表4は図1を分析するために整理した概念表である。以下、必須通過点を『』、分岐点を“ ”、行為・経験を<>、心情を<>, 社会的ガイド(以下、SG)および社会的方向づけ(以下、SD)を二重線、研究協力者の実際の語りを「」で記す。

表4 TEM で用いた概念の本研究での位置付け

概念	本研究での位置づけ
等至点: EFP (Equifinality Point)	実体を伴わない、いい別居親像をもつ 実体を伴わない、いい別居親像をもち続ける
両極化した等至点: P-EFP (Polarized Equifinality Point)	1人の人間としての別居親像をもつ
分岐点: BFP (Bifurcation Point)	面会なし 面会開始
必須通過点: OPP (Obligatory Passage Point)	両親が別居もしくは離婚する 愛情を感じる安定した生活環境 別居親について触れてほしくなさそうな同居親の様子 面会時のいい思い出 理由がわからない中断 自分から積極的に会おうとは思わない
社会的ガイド: SG (Social Guidance)	世間一般の父親像 同じ境遇の友人 本から得る様々な価値観 別居親の新しい家族からの「関係しないでほしい」という手紙 いいイメージが壊れてしまう可能性への恐れ
社会的方向づけ: SD (Social Direction)	周囲との違い 自分のことを知ってほしい ルーツである別居親を知りたい 結婚や離婚への漠然とした不安感

2. 2つの等至点と背景要因

(1) 実体を伴わない、いい別居親像をもつ (等至点①)

研究協力者の3名は0～4歳の幼少期に『両親が別居もしくは離婚する』経験をしている。当時別居や離婚についての説明が両親からあったかについては、Aは「された覚えがない」、Cは「記憶がない」、Bは生まれた時には既に離婚していたとのことだったため恐らくなかったものと考えられる。離別後は、「(母親と母方祖父母と生活しており)安定してましたね、それが当たり前になっちゃってました。(A)」のように、3名とも『愛情を感じる安定した生活環境』において生活をしてきた。“面会(が7歳まで)なし”であったAは、小学校で友人から何故父親がいないのかを聞かれるなどすることで、両親が揃う周囲との違い(SD)を感じ、《別居親への関心》をもつ。しかし、そのことを同居親である母に聞いた際に『別居親について触れてほしくなさそうな同居親の様子』を受け、葛藤を感じ、《別居親のことを聞けなくなる》。その時の体験をAは「母親が泣いたところを見たのが初めてだったので、そんなに辛かったんだ、じゃないですけど…(中略)…辛くって我慢してたのかなっていうので、もうそこからはずっと(別居)親に関しては聞けなくなりました。一切。」と語っている。しかし、母親に尋ねた後しばらくして<面会(が)開始>される。

一方、BおよびCは、幼稚園時に“面会(が)開始”している。面会に関しては、「(テーマパークに行き、常に行動を共にしてくれる父親に)常に笑っている人だったので、優しいそう? 楽しそう? みたいなの。忘れかけてたんで、上書きされた感じ(笑)。こんな優しい人なんだあ、みたいな感じ。(A)」
「車の中でその時は母親も一緒に乗ってて、話の内容は覚えてないんですけど、なんかすごい楽しかった記憶があって。(B)」
「ポケモンのゲームと一緒にして過ごした記憶と…(中略)…なんとなく温かい思い出じゃないですけど、そんな感じで残ってるというか。(C)」と

いったように、3名とも『面会時のいい思い出』をもっていた。そして、それぞれ6～8歳時(思春期前)に「自然と、あー会わなくなったなあ、みたいな。多分引っ越した友達みたいな感覚なのかなって印象ですね(C)」といったような『理由がわからない中断』を経験している。そして、別居親に関しては3名ともいいイメージのまま変化していない(止まっている)との話であった。Cは別居親像を、「実感がほぼないので、どうしてもイメージ。父親っていうものはこういうものだよって世間一般のイメージと自分の中にある父親と関わった時のイメージとで出来上がっている抽象的なもの。…(中略)…神とか、変な話、幽霊とか妖怪とか、なんか小さい頃に会ってこんな印象だけど、他の人はこう言ってるよねって。うーん、実体を持ってない感じが強いというか…。(C)」と語っていた。

(2) 実体を伴わない、いい別居親像をもち続ける(等至点②)

その後、B、Cは中高生時に同級生や、きょうだいといった周囲との違い(SD)を感じ、別居親への関心をもつ。特にBは上のきょうだいは面会交流を続けていたため「なんで自分だけ(会っていないのだろう)?」と思っていたと言う。しかし、同居親である母に別居親に関する話を聞いた際に、BもCもAと同様、『別居親について触れてほしくなさそうな同居親の様子』を受け、葛藤を感じ、別居親のことを聞けなくなる。「(母親は)私一人で育てたのよって多分思っているんで。それがあから余計会わせたくないのかなって思う。…(中略)…んー、ちょっとやだなーみたいな感じで多分話されたと思います。私が見たいなーみたいな感じでいたんですよ。そしたら、そう言っていたような気がします。(B)」「中学とか高校とかぐらいから、知りたいは知りたいけど、まあなんか聞けない。…(中略)…自分から動いてちょっとわかる部分があるけど、それ以上は(母親は)自分からは喋らないのかなーみたいなのをちょっと察したので。…(中略)…(自分から聞いた時は)どういう人だったかとかはなんかはぐらかされた。なんかさつとそのまま流されて。あー、言ってくれないんだーって思った記憶がある。(C)」とそれぞれ語っている。それ以降は「なんかそこまで深掘りしてその記憶(別居親との記憶)を蘇らせてもなっていう変な気遣いじゃないですけど。…(中略)…単純に(母親との)関係を壊したくないとかって言うのもちょっとあるのかなって。(C)」と言う語りからもわかるように、二人とも母親を気遣って別居親のことを聞けなくなっていった。そして、両者とも別居親に『自分から積極的に会おうとは思わない』ようになっていった。特に、Bは同時期に同居親宛に、別居親の(再婚した)新しい家族(妻)からの「関係しないでほしい」という手紙(SG)が来たことを知り、「それ聞いてから、私も全然自分から会いたいって思わないんですけど。まあでもそうだ、普通に考えてそうなんだろうなって思って。(B)」と自分からは会わない気持ちが強まったと語っている。

一方、小学生時に既に別居親について聞けなくなっていたAは、中学生時に親の離婚を経験している同じ境遇の友人(SG)や本から得る様々な価値観(SG)との出会いから、別居親のことを気にしなくなるようになっていった。「全部話せる仲の友達ができたのは支えになったなって思います。(A)」と語るように、同じ境遇の友人ができたことは大きな力だったと考えられる。そして、Aもまた『自分から積極的に会おうとは思わない』ようになっていった。

その後成長に伴い、自分のことを知ってほしい(SD)、ルーツである別居親を知りたい(SD)といった思いや、結婚や離婚への漠然とした不安感(SD)から、3名とも再び別居親への関心が

高まる。「本当はどんな人だったんだろう? って。(A)」「(会った場合)やっぱり父親なんだなって思うのか?…(中略)…繋がりみたいなのを感じるのかなって言う興味はちょっとありますけど。(B)」「やっぱ自分とのルーツじゃないですけど。全く片方しかわかってないので(笑)。まあ、そのおかげでいい環境だったって言うのもあるんですけど、単純な興味として父親に会ってみたいというか。(C)」という語りからは、ルーツである別居親への関心が伝わってくる。また、Bは、「大学ぐらいまでは、“今こういうのをやってるよ”って知ってほしいなどは何回かは思ったんですけど。(B)」と、自分のことを知ってほしい気持ちがあったと語っている。そして、恋愛や結婚適齢期になってくると自分も離婚してしまうのではないか? という漠然とした不安感を3名とも感じていた。「結局別れちゃうかもしれないし、それで自分がグラグラってなっちゃったり、お母さんみたいに傷つくのも怖いなって思ったりすると…(中略)…男の人と恋愛かー(と一歩引いてしまうような気持ち)になっちゃう。(A)」「周りが結婚して子ども産んでって話を聞いていると、なんか自分にできるのかなとか。耐えられなくてやっぱ離婚したいってなっちゃったら怖いなって。…(中略)…父親のポジションとかあんまわかんないので。(B)」「自分の性格が父親譲りだったのかってというのが知りたい。…(中略)…(もし似ているなら)自分ももしかしたら離婚しちゃうのかなとか。(C)」とそれぞれ語っている。特に男性であるCは、「離婚した男性がその後どうしているのかっていうのも気になる。」とも語っており、同性である別居親への関心が高まっていることが窺えた。ただ、それでも、「結構割り切っちゃってるところもあるので。(父親と)関わらないというか。触れないっていう風に。(B)」という語りのように、3名とも『愛情を感じる安定した生活環境』を長年作ってくれている同居親に別居親のことは「どうしても聞けない」と感じていた。また、「会いたいなとも思うんですけど、イメージが変わったらどうしようっていうのはやっぱりある。ありますね。(A)」「結構その人(別居親)を知りたいっていう気持ちはあるけど、実際に会うってなったらちょっとなんか…怖いかな。(C)」という語りからは、現在持っている別居親のいいイメージが壊れてしまう可能性への恐れ(SG)があることがわかる。このようなプロセスを経て、3名とも、実体を伴わない、いい別居親像をもち続けるに至っていた。

考察

1. 実体を伴わない、いい別居親像が形成されること

親の離婚を現実的に理解し、親との関係性を改めて捉え直していく時期は小学高学年からの思春期以降であると報告されている(小川, 2018; 野口, 2019)。本研究の研究協力者は思春期前に面会交流が中断しているため、別居親像はその前の印象で留まっている。本研究においては、いい思い出となる面会交流があること、そして理由がわからないまま思春期前に面会交流が中断することが中心的な出来事となり、いい別居親像が形成されたと考えられる。しかし、その別居親像は、Cが「…神とか、変な話、幽霊とか妖怪とか、なんか小さい頃に来てこんな印象だけど、他の人はこう言ってるよねって。うーん、実体を持ってない感じが強いというか…。(C)」と語っているように実体を伴ったものではないように考えられた。このような別居親像は、面会交流を思春期以降まで継続していた子どもがもつ、1人の人間としての別居親像(小川, 2018; 野口, 2019; 小川, 印刷中)とは異なっている。一方で、いい別居親像という意味では、同居親から面会交流を中断させられた20代女性の事例研究(小川, 2019)の女性ももつ別居親像に似ている

と考えられる。

そして、このような実体を伴わない、いい別居親像をもち続ける背景には、別居親について関心をもち、そのことを尋ねようとした際の同居親の別居親に触れてほしくなさそうな様子があった。両親の離婚後、日常的に関わる親が一人になった場合、その親は子供にとって命とも言える存在になる(棚瀬, 2004)。ましてや、愛情を感じる安定した生活環境を長年守ってくれている同居親は子どもにとっても守りたい大切な存在であろう。その同居親が自分が別居親への関心をもつことを嫌がっている素振りをした場合、そこに葛藤が起きるのは想像に難くない。本研究でも「(同居親の涙を見て)もうそこからはずっと(別居)親に関しては聞けなくなりました。一切。(A)」 「(同居親が自分が別居親に関心をもつことを嫌がっているように感じ)結構割り切っちゃってるところもあるので。(父親と)関わらないというか。触れないっていう風に。(B)」と語っているように、3人とも別居親に関しては同居親に聞こうとしていない。また、実体を伴わない、いい別居親像を持ち続けるもう1つの背景として、今までもっていた別居親のいいイメージを壊したくないという気持ちが子どもにあることもわかった。自分のいい別居像を壊さず大切にしておきたい気持ちは、同居親から面会交流を中断させられた20代女性の事例研究(小川, 2019)にもみられる傾向である。「優しいお父さんのままでいてほしいじゃないですけど、私のお父さんはこういう人なんだって自分で思っておきたいというか、(そういう風に)言えるような感じでいてほしい。(A)」といった語りからは、いい別居親像のイメージを守りたい気持ち、イメージが壊れることへの恐れが感じられた。

2. 結婚や離婚への漠然とした不安感

別居親に関心を持たなければ、同居親や同居親が用意してくれている安定した生活環境との葛藤も生じず、A,B,Cの生活は安定しているように見える。ただ一方で、こうした状態において、子どもは別居親に関連する不安感を出しにくいということも考えておく必要があるだろう。思春期の間は友人やきょうだいなど周囲との違いから別居親に関心をもっていたA,B,Cだが、青年期に入ると、ルーツである別居親を知りたいという気持ちや結婚や離婚への漠然とした不安感が出てくるようになる。特に「自分も離婚するかもしれない」という不安感は全員から聞かれ、自身の恋愛や結婚に関する葛藤や不安が生じていた。このことは、親の離婚を経験した子が青年期以降に、自身の恋愛や結婚に関する葛藤や不安をもつ可能性があることを示唆している先行研究(Wallerstein, 1985; 野口・櫻井, 2009; こども未来財団, 2013)とも一致している。さらに、本研究においては、「離婚とかの詳しいことは聞けてないし、知らないの、どうなってるんだろうとかって気になるし、聞いてみたいなっていう気持ちはやっぱりあるんですけど、でもどうしても聞けないの。(A)」 「離婚するかもって自分で思い始めた時は、仲良さそうだったんだけどなっていう、なんでだろう?っていう疑問の方が大きかったかもしれない。(A)」というAの語りや「離婚した理由を知らないの、そこを勝手に色々想像できちゃうじゃないですか。…(中略)…(離婚理由の1つに父の性格が関係していて、もし自分の性格が父親譲りだしたら)自分ももしかしたら離婚しちゃうのかなとか。(C)」というCの語りからは、別居親に関する情報がほとんどないということが、結婚や離婚への漠然とした不安感を強めているのではないかと考えられた。

小川(印刷中)は、思春期以降に面会交流を中断した子どもは、その後、両親の関係性や自分と両親との関係性を俯瞰的に捉え、両親の離婚と適度な距離をもてるようになる可能性を示唆している。両親の関係性や自分と両親との関係性を俯瞰的に捉えるためには、両親がどのような人間なのか、ある程度理解している必要がある。本研究における3名は、いい別居親像を形成しているが、離婚理由も中断理由もはっきりと教えてもらっておらず、別居親像も実体を伴っているわけではない。漠然とした別居親像や両親の関係性が、より漠然とした不安感を高めている可能性が考えられる。「やっぱ自分とのルーツじゃないですけど。全く片方しかわかってないの(笑)。まあ、そのおかげでいい環境だったって言うのもあるんですけど。(C)」とCが話すように、別居親の情報を極力排除した環境は、安定した環境を作り出すかもしれない。ただ、青年期以降、別居親の情報が少ないことが結婚や離婚への漠然とした不安感を高める可能性は考えておく必要がある。

思春期以降に面会交流を中断した子どもは、中断する最終的なきっかけによっては葛藤を抱えるが、家庭内で別居親や離婚について話しても同居親が普段と変わらず受け止めてくれることなどで自分の気持ちを吐き出し、両親の離婚と適度な距離をもてるようになっていった(小川, 印刷中)。これは、別居親について触れても同居親との関係性が壊れないと感じられることで、子どもは安心して心の整理をすることができたためではないかと考えられる。本研究における研究協力者の3名は、すべて別居親について触れてほしくなさそうな同居親の様子から別居親のことを聞けなくなり、実体を伴わない、いい別居親像をもち続けるに至っている。同居親が別居親について触れても問題ない様子であった場合、子どもの別居親像形成のプロセスはどう変わっていくのか、そしてその結果、結婚や離婚への漠然とした不安感は低まる可能性があるのかについては、今後検討していく必要があるだろう。

3. 日本社会がもつ固定観念

前述した通り、TEMは、時間を捨象せず個人の変容を社会との関係で捉え記述しようとする方法論である(安田・サトウ, 2012)。本研究の個人の変容に社会がどのように関わっているのかを最後に考えていきたい。野沢(2019)は、高度経済成長期の日本では、離婚・再婚を避け、長続きする初婚家族が「当たり前」で「ふつう」であるような社会が実現した、と言及している。そして、離婚後は、子どもの親はひとりになるという固定観念が社会に浸透しており、親権を持つ親が再婚すると、離婚前にあった父母がひとりずついる家族が再建されることになる暗黙裡に想定されていると述べ、日本におけるこういったパターンを「スクラップ&ビルド型」と呼んでいる(野沢, 2019)。本研究においても、3名がまず別居親への関心を抱くのは、両親が揃う友人など周囲との違いからであった。このことから両親が揃っている家族が「当たり前」で「ふつう」であるという考えが社会に浸透していることが読み取れる。また、別居親への関心をもつことで同居親との間に葛藤を感じた後、Bは別居親の再婚した新しい家族(妻)から「関係しないほしい」という手紙が来たことを知って、自分から会いたいと思わなくなったと語っている。「まあでもそうだ、普通に考えてそうなんだろうなって思って。(B)」という語りからは、離婚後は、子どもの親はひとりになる(別居親との関係は切れる)という固定観念が社会に浸透しており、Bもそれが当たり前のことだと思っていたことがわかる。

「自分の親がどういう人かを知りたい」という思いは非常に自然な感情だと思われる。その気持ちを踏み留ませるのは、前述した同居親との関係もあるが、日本社会がもつ固定観念の力も大きいように考えられる。

野沢(2019)は、離婚後も子どもと両親の関係が切れることなく、たとえ両親が再婚しても、子どもにつながる人が増えていくパターンを「連鎖・拡張するネットワーク型」と呼び、従来の「スクラップ&ビルド型」を前提にした社会から「連鎖・拡張するネットワーク型」の実現を目指す社会へと舵を切ることを提案している。日本社会がもつ固定観念を変化させていくためには、こういった概念を広げると共に、現在増えてきている面会交流支援団体の支援や子どもの声を伝えていく取り組みが必要になっていくだろう。

本研究の課題

本研究では、思春期前だけに面会交流を経験した子どもの別居親像形成のプロセスを明らかにすることで、子どもが別居親像を形成するまでにどのような経験や感情を抱くかを詳細に検討した。しかし、今回の研究協力者の3名は、思春期前だけに面会交流を経験しているという点以外にも、愛情を感じる安定した生活環境や面会時のいい思い出、別居親について触れてほしくなさそうな同居親の様子など、共通点が多くあった。そのため、今後は協力者数を増やして、より多様性を把握していく必要がある。特に、同居親が別居親について触れても問題ない様子であった場合、子どもの別居親像形成のプロセスはどう変わっていくのか、その際に結婚や離婚への漠然とした不安感は低まる可能性があるのかについては検討していきたい。また、日本においては、離婚後の子どものケアが少ないと言われているが、離婚後の親のケアも少ない。本研究にでてきた別居親について触れてほしくなさそうな同居親もまた傷つき、ケアを必要としていることを忘れてはならない。離婚後の家庭を総合的にどう支援していくかについても、今後検討していく必要があるだろう。

謝辞

本研究にご協力くださいました研究協力者の皆様に心より御礼申し上げます。また、分析・執筆にあたりご指導・ご助言をくださいました塩崎尚美先生、分析に際しご意見をくださいました氷室綾先生に深く感謝申し上げます。

文献

- 秋光恵子・村松好子. (2011). 父親の関わりが児童期の社会性に及ぼす影響. 兵庫教育大学研究紀要, 38, 51-61.
- 青木聡.(2011). 面接交流の有無と自己肯定感 / 親和不全の関連について. カウンセリング研究所紀要, 34, 5-15.
- 法務省. (2020). 面会交流. (2020年9月6日閲覧)
- 加藤邦子・石井クンツ昌子・牧野カツコ・土谷みち子.(2002). 父親の育児かわり及び母親の育児不安が3歳児の社会性に及ぼす影響: 社会的背景の異なる2つのコホート比較から. 発達心理学研究, 13(1), 30-41.
- Kelly, J.B. & Emery, R.E. (2003). Children's adjustment following divorce: Risks and resilience perspectives. *Family*

Relations, 52, 352-362.

- こども未来財団. (2013). 親の離婚を経験した子どもの成長に関する調査研究：家族として再編成するために.
- 今野歩. (2012). 青年が認識する父親像の特徴とその発達の变化. *生涯発達心理学研究*, 4, 65-74.
- 今野歩. (2017). 青年期における父親像の類型化とその特徴. *家族心理学研究*, 31(1), 56-68.
- 厚生労働省. (2017). 全国ひとり親世帯等調査 (2020年9月1日閲覧)
- 厚生労働省. (2020). 平成30年人口動態統計 (報告書) (2020年9月1日閲覧)
- 野口康彦・櫻井しのぶ. (2009). 親の離婚を経験した子どもの精神発達に関する質的研究：親密性への怖れを中心に. *三重看護学誌*, 11, 9-17.
- 野口康彦 (2019). 離婚後に別れて暮らす母親と娘との面会交流に関する探索的研究：3人の女子学生のPAC分析を通して. *茨城大学人文社会科学部紀要人文コミュニケーション学論集*, 4, 93-106.
- 野沢慎司 (2019). 離婚・再婚後の家族のかたちと子どもの育ち - 現代日本の「固定観念」を超えて. *離婚・再婚家族と子ども研究*, 1, 2-13.
- 小田切紀子. (2009). 子どもから見た面会交流. *自由と正義*, 12, 28-42.
- 尾形和男. (1995). 父親の育児と幼児の社会生活能力 - 共働き家庭と専業主婦家庭の比較 -. *教育心理学研究*, 43, 335-342.
- 尾形和男. (2011). 父親の心理学. 北大路書房.
- 小川洋子. (2018). 子どもが面会交流を通じて別居親と新たな関係性を築くまでのプロセスに関する質的研究. *家族心理学研究*, 32(1), 14-27.
- 小川洋子. (2019). 同居親から面会交流を中断させられた子どもの語り. *日本女子大学生涯学習センター心理相談室紀要*, 18, 53-63.
- 小川洋子. (印刷中). 思春期以降に面会交流を経験した子どもが別居親と離れていくプロセスに関する質的研究. *家族心理学研究*, 34(2).
- 大島聖美. (2009). 青年の親イメージの変容プロセスとその要因. *人間文化創成科学論叢*, 12, 231-239.
- 裁判所. (2020). 面会交流調停. (2020年9月6日閲覧)
- サトウタツヤ. (2015). 日本コミュニティ心理学会 第17回大会特集 研究委員会企画シンポジウム TEA (複線径路等至性アプローチ). *コミュニティ心理学研究*, 19(1), 52-61.
- 棚瀬一代. (2004). 離婚の子どもに与える影響：事例分析を通して. *現代社会研究*, 6, 19-37.
- 棚瀬一代. (2010). 離婚で壊れる子どもたち：心理臨床家からの警告. 光文社新書.
- Wallerstein, J.S. (1985). Children of Divorce: Preliminary Report of a Ten-Year Follow-up of Older Children and Adolescents. *Journal of American Academy of Child Psychiatry*, 24(5), 545-553.
- Wallerstein, J.S., Lewis, J.M. & Blakeslee, S. (2000). *The Unexpected Legacy of Divorce: A 25 year Landmark Study*. Hyperion.
- 安田裕子. (2005). 不妊という経験を通じた自己の問い直し過程 - 治療では子どもが授からなかった当事者の選択岐路から. *質的心理学研究*, 4, 201-226.
- 安田裕子・サトウタツヤ. (2012). TEMでわかる人生の径路 質的研究の新展開. 誠信書房.
- 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ編. (2015). TEA 実践編 複線径路等至性アプローチを活用する. 新曜社.